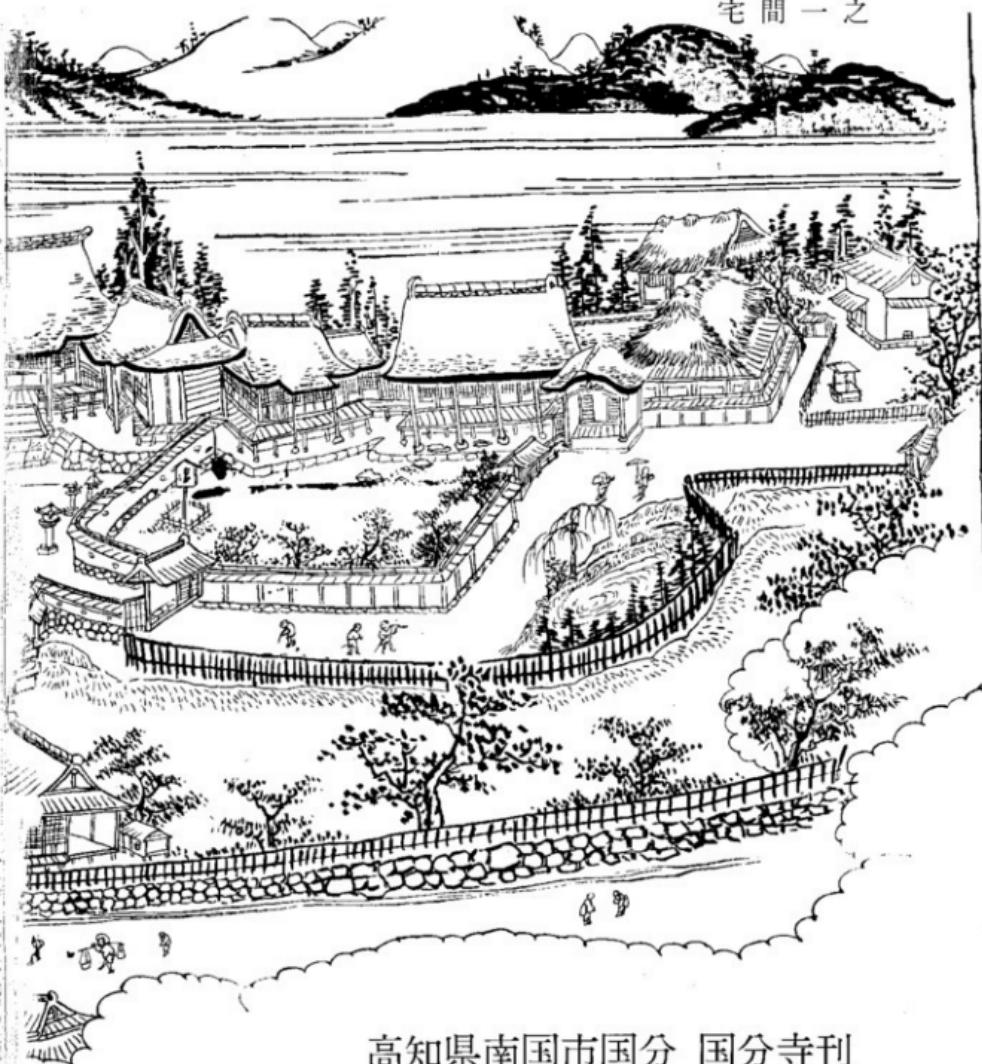


土佐国分寺

庫裡改築に伴う発掘調査概報

児夫之
健典一
岡廣宅
本田間



高知県南国市国分 国分寺刊

昭和54年10月30日

ごあいさつ

土佐国分寺では、書院ならびに鐘楼堂の新築につづき、老朽著しかった庫裡を改築し巡拝者の便宜をはかるべき宿坊施設の新築を計画いたしました。

この宿坊建設にあたり、国分寺境内地は史跡指定地であり、文化財保護法により先の書院建築の場合と同様事前の発掘調査が必要でございます。つきましては、高知県教育委員会、南国市教育委員会の御指導をいただき、また高知女子大岡本健兒教授・高知ろう学校廣田典夫教諭・高知県教育委員会文化振興課宅間一之主事の御協力を得て発掘調査を実施いたしました。

庫裡は書院の北側に位置し、解体中に明治41年改築の棟札が発見され、また寺に残る古地図と照合してみると、もとの蓮池が明治の改築に際し埋められ庫裡が建立されたものであったことがわかりました。また江戸初期に築造されたと推定されます池の跡の確認や、古瓦の出土、さらに弥生人の貯蔵穴も発見され、またしても国分寺創建以前にこの地に入々が住んでいたことも確認されました。

このたび、発掘調査を担当いただきました岡本・廣田・宅間先生の全面的な御協力によりその報告書を刊行することができました。先生方に深甚なる感謝を申しあげるとともに、このたびの建築にあたり御協力いただきました方々の御厚意に対しこの報告書をもちましてお礼にかえさせていただきたいと存じます。

国分地区はいまや土佐国衙跡の確認調査がすすめられております。奈良天平の昔、国衙と相並び貴重な存在であった土佐国分寺跡の発掘調査が、これらの確認調査に先がけて実施され、土佐の歴史・土佐の文化の変遷を知る貴重な資料を提供したことは意義の大きいことと思います。今後も土佐国分寺が土佐のまほろばの寺として人々に末長く親しまれ、また参詣者にとっては心のやすらぎの場となり大切に受け継がれていくよう期待してやまないものであります。

昭和54年10月吉日

国分寺住職 林 廣 裕

例 言

1. 本概報は、土佐国分寺庫裡改築に伴い、土佐国分寺林広裕住職が事業主体者となって実施した緊急発掘調査の概報である。
2. 発掘調査は、岡本健児（高知県文化財審議会委員、高知女子大学教授）・廣田典夫（高知県文化財審議会委員、高知ろう学校教諭）・宅間一之（高知県教育委員会文化振興課埋蔵文化財担当主事）が担当したが、現地調査には、武田勝（南国市教育委員会社会教育課主幹）・鈴木省一（早稲田大学教育学部学生）・岡本桂典（立正大学文学部学生）・井上正隆（高知大学人文学部学生）・廣田佳久（立正大学文学部学生）があたった。昭和53年9月1日から9月20日までの間は現地における調査を、またそれ以降出土遺物、図面整理をおこない作業を完了した。
3. 本概報の編集は宅間一之が担当し、執筆には
　岡本健児（発掘調査の概要、出土遺物＝後期弥生土器、中・近世遺物）
　廣田典夫（出土遺物＝須恵器、歴史時代土師器、中・近世遺物、瓦類）
　宅間一之（序、付録 土佐国分寺古図について）
　があたり、整理・整図は岡本健児・廣田典夫・岡本桂典・鈴木省一・廣田佳久があたった。写真は宅間一之が担当した。
4. 調査協力者として浜田初美、森義明、井上美代子、徳橋忠昭、井上博恵、井上速男氏があたった。

目 次

1. 序	1
2. 発掘調査の概要	3
I A地区	3
II B地区東部	7
III B地区西部	21
3. 出土遺物	23
I 後期弥生土器	23
II 須恵器	25
III 歴史時代土師器	28
IV 中・近世遺物	30
V 瓦類	36
付録	
土佐国分寺古図について	47

1. 序

南国市国府546番地に所在する土佐国分寺は、大正11年10月12日、国の史跡に指定され保護・保存されている。従ってなにも勝手に現状を変更することはゆるされない。しかし、明治期に建立された宿坊が、梁の垂下や柱の傾斜等その老朽化が甚しく、昭和53年7月5日付で、国分寺住職林広裕氏から管理者である南国市教育委員会を通じ、面積263平方メートルにわたって、鉄骨造一部コンクリートブロック造、和形スレート瓦葺平屋の改築予定書が工事仕様書を添付し現状変更願として提出された。

統いて昭和53年7月10日付で、基礎工事予定地を含む350平方メートルにわたって埋蔵文化財発掘届が提出された。

文化庁からは、現状変更に対し、申請地は地下遺構の存在が予測されるところであり、事前に発掘調査を行い、その結果を待って処理することが適当であると考えるので、申請者及び南国市教育委員会においても発掘調査について配慮するようにとの回答をうけた。この回答に基き、高知県教育委員会・南国市教育委員会・土佐国分寺・発掘調査担当者の協議により、昭和53年9月1日より、遺構確認のための緊急発掘調査を実施することとなった。

なお、史跡・土佐国分寺跡内の発掘調査は、今回の調査が第三次である。昭和52年2月4・5日の両日、鐘楼建立地の、また昭和52年5月23日から5月28日まで書院建替に伴う発掘調査が行われている。いずれも現状変更に伴う緊急発掘調査であるが、その結果は、土佐国分寺の刊行になる『土佐国分寺・鐘楼建立・書院改築に伴う発掘調査』(岡本健児・廣田典夫・宅間一之 昭和53年2月8日)によって報告されている。

(宅間)



土佐国分寺跡は、南国市国府546番地に所在する。寺域の東南角より東北角に至る部分に、草創当時の土塁が残存する。高さ1.5~2メートル、幅3~4メートルであり、全長は136メートル(450尺)ある。また東北角より西方にむけて65メートルほど残り、それから西は亡失し水田化されている。しかし、寺域の西北角と推定できる部分には明治初年ごろまで寺域を示す籠があったと伝えられる。その地点まではおよそ152メートル(500尺)ある。従って創建当時の土佐国分寺の寺域は南北450尺、東西500尺と推定してよかろう。現在の寺域は、西北部と西部が一部水田化され個人所有となっているが、逆に仁王門周辺は若干はみだしているようである。

(宅間)

2. 発掘調査の概要

発掘調査した面積は約360 平方m そして深さ 1~1.5m程度に掘り下げた。以下発掘地区分およびグリッド別に発掘の概要を述べよう。

I. A地区

現在土佐国分寺で使用している排水溝（第1図発掘平面図のD I T C H）の東部をA地区とした。A地区はこれも現在使われている堀によって、A-1区・A-2区と分けた。A-1区は今回の発掘予定地であったが、A-2区を発掘する過程において、A-2区の遺構である版築部と川原石を積んだ部分とのつながりを確認するために、幅1.5m、長さ5mのトレンチを入れた。

A-2区の表土（深さ約25cm——黒色腐植土）を除去したところ、その一部に深さ7cmの粘土を数きかためた版築部と、その北部に礫を一面にしいて、その上に粘土をのせかためた部分とが発見された。そこで特に礫上の粘土をはぎ、礫面を露出した。この礫面には、とくに国分寺創建当初の古瓦片・須恵器が発見されたが、それらは細片であった。重要なことは、この礫の中に一部であるが、近世末と明治期とみられる遺物、例えば磁器片・煉瓦片がみられたことである。

ここでこの遺構の東部の状況をみると先述したA-1区にトレンチを入れた。この地区は擾乱の非常にげしい地区であって、A-2区にみられた遺構の一部、版築部はごく一部にみられたにすぎず、A-2区につづく遺構はほとんどみられなかった。A-1区のトレンチの発掘の結果からして、版築部は東へいますこし延びていたと思われるが、A-1区の擾乱時（この擾乱は大正時代から昭和にかけてのものとみられる）に破壊されたと思われる。

この版築と川原積石上の粘土敷は、部分的にその構築を異にするが、その平面の高さ等からして、一つの建造物の基盤であったとみられる。この建築物の基盤は、破壊されその全容をみるとできなかったが、発掘した遺構から、間口約6m・奥行約6mの方形の基盤とみてよかろう。そしてこの基盤の上に建てられた建造物は、出土物から推定して江戸時代後半から明治時代にかけてのものとみられる。



A - 2区 発掘前



A - 2区 版築部と川原石群



A - 2区実測状況



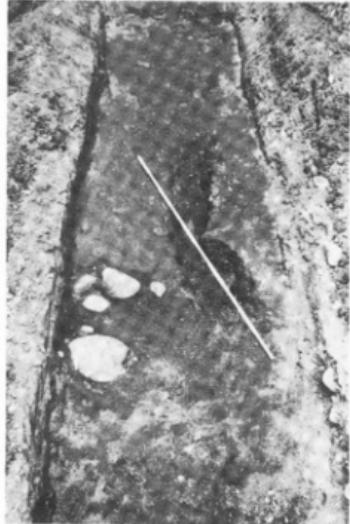
A - 2区古瓦・須恵器片出土状況



A - 2区　須恵器片出土状況



A-1区 トレンチ全景 (1.5m×5m)

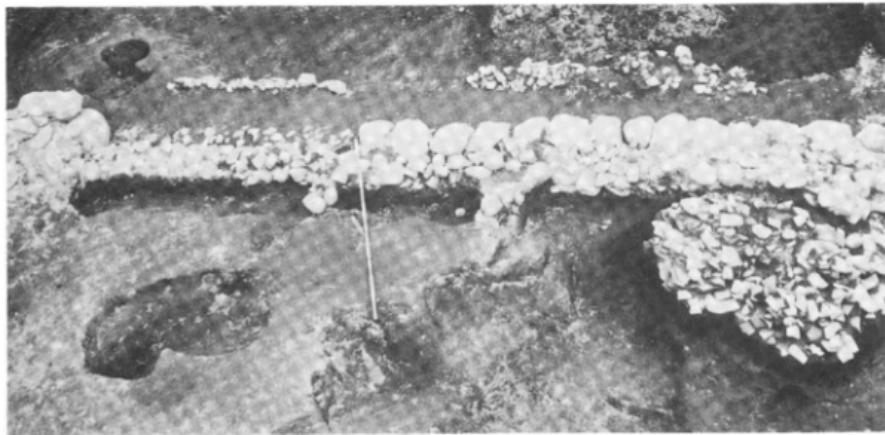


A-1区 トレンチ近景

この建造物については、なお幸いなことに、土佐国分寺に藩政期から明治前半にかけてのいくつかの「土佐国分寺配置図」が残っていることから、これが当時の納屋跡であることも推定することができた。納屋は基盤の広さから、間口3間・奥行3間か2間半のものでなかろうか。

なおA地区では、深さ70cmで砂礫層にいたり、次に述べるB地区とはその基盤を異にしていることが判明した。A地区的砂礫層は、古国分川が運んだものである。この砂礫層は土佐国分寺の東の部分の地下に広く分布するものとみられる。そして発掘の結果、判明したような近世末期における納屋の建造において、その基礎に1部に版築、1部に川原石敷上の粘土床を見るのは、その基礎の地層がこのような砂礫層であることに原因する。

(岡本)



II. B地区東部

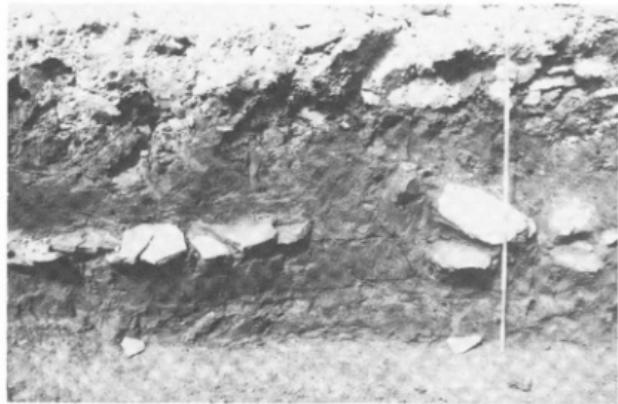
B地区は庫裡の建っていた部分とその前面の庭の部分とがあり、ほとんど全面を発掘した。この地区もA地区と同様に藩政後期から明治時代にかけての擾乱がはげしかった。

B地区東部は特に擾乱がはげしく、深さ1.5mの地山層（赤色粘土層）まで掘り下げたのであるが、ほとんどがすでに地山層まで過去において擾乱がなされ、近代の巴文瓦や磁器類が奈良時代の瓦片や須恵器片と混在する状態で出土した。

B地区発掘区に東南から西北にかけて一列の石列がある。この石列はその南側に根石的役割をなす小栗石群を持っている。石列の石は珪岩をもって作られている。また発掘前にこの場所に建っていた建造物は、この栗石を土台として建てられていた。(この建造物の年代は発見された棟札から明治末期のものとみられる。)もちろんこの礫石の石列の周辺、あるいはその下部の小栗石群からは、明治期に使用された陶磁器破片なども多く発見されている。

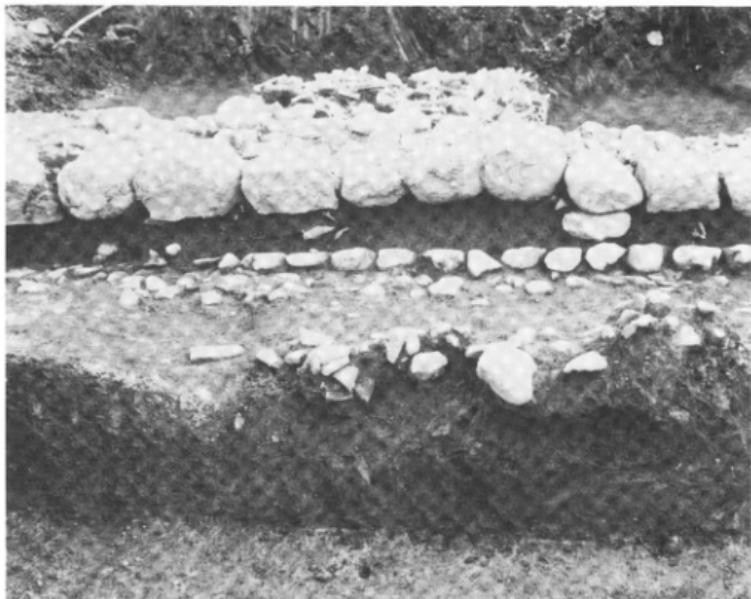


B地区 石列全景



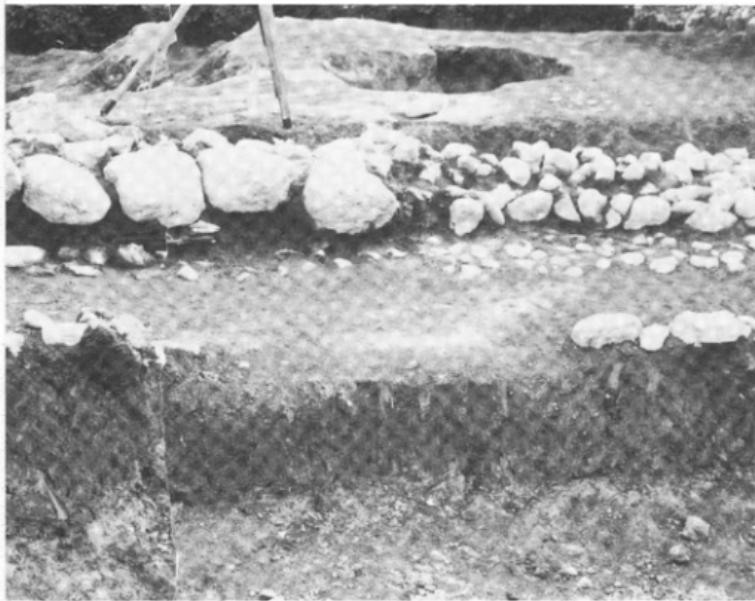
B地区 東部の攪乱状況

さらにこの礎石の石列群は、その北側に石列群に平行して、軒の雨垂落ちと排水路とを兼ねた造構を持っていた。ただこの造構はB地区西部にのみ発見された。この雨垂落ち兼排水路は、その西端の部分で明確になったのであるが、一方に川原石の石列を持ち、幅80cm（水路の部分だけ）であり、その底部は固く版築状に固ためてあった。この排水路の両側の川原石のなかには、自然木の横木などもあって、その築造の年代が明治の末期であることを物語っている。ただこの排水路は現在の国分寺はまったくご存知ないことであって、明治期に建造された庫裡の軒下の排水路として使用されていたが、その後この排水路の不必要になったことから埋没されてしまったのであろう。



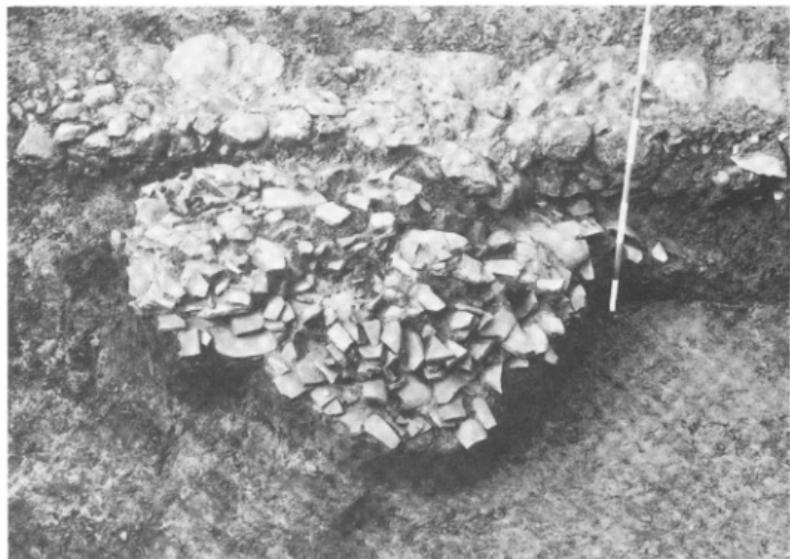


排水路両側の川原石出土状況



雨垂落兼排水路遺構

この礎石群に接して瓦溜（第1図平面図その1のT-1）が発見された。多量の奈良・平安時代の平瓦と須恵器の破片がこの部分に堆積されていた。この瓦溜は綿密な調査の結果、その中に近代の巴瓦なども少量であるが含むこと、また瓦の堆積の状況、さらに瓦の堆積が礎石の高さにほぼ等しいことなどから、この瓦溜は明治期に庫裡を建立するに際して、出土した多量の瓦群をここに2次的に埋めたものであることが判明した。



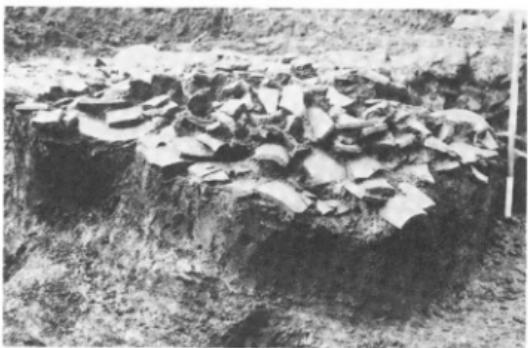
瓦溜(T-1)遺構



川原石群と瓦溜



瓦堆積状況

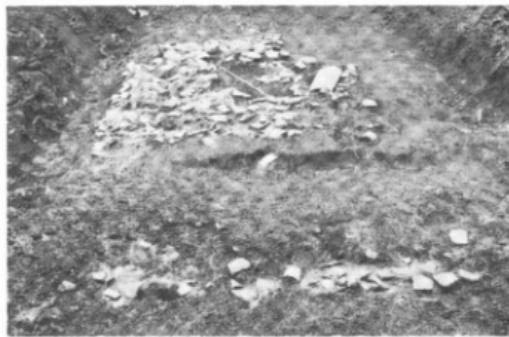
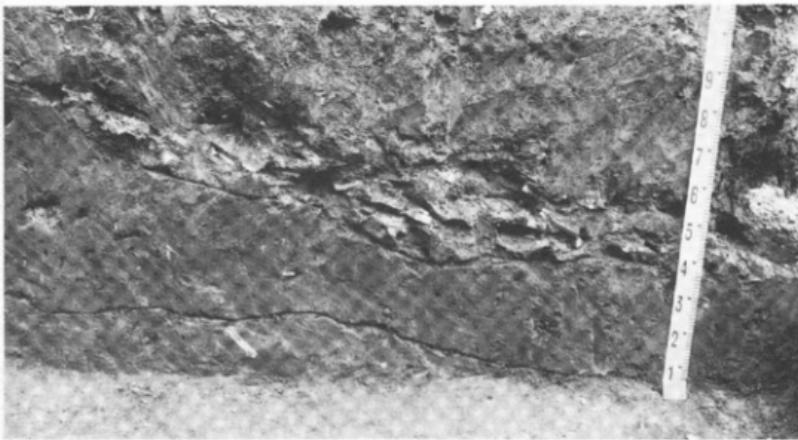


瓦堆積状況



T-2瓦溜層位

さらにT-2の瓦溜群もほとんど平瓦のみの古瓦群であるが、これにも近世末～近代初頭の瓦片を少量含んでいることから、この堆積も2次的なものであることがわかった。ただこの部分の堆積は、層位からいうと表土層（擾乱層）と第2層（シルト質黒色土層）の間にはきまれている。そして北から南に向けて傾斜して堆積し、またT-1の瓦溜に比較するとその堆積の層は薄い。これも先述したように新しい2次的な堆積であるが、そこでの出土状況などから判断して、明治末年の庫裡再建時の堆積ではなく、それ以前のものと考えられる。



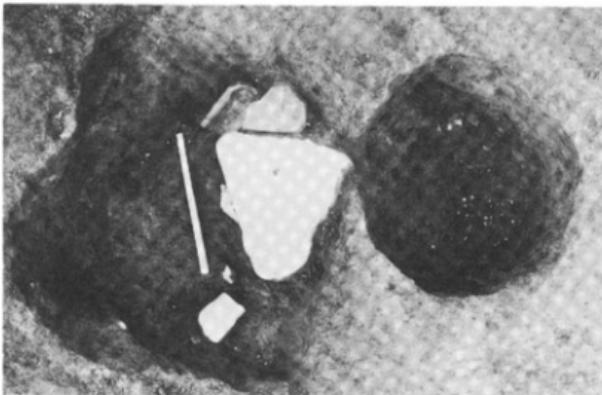
T - 2 瓦溜全景



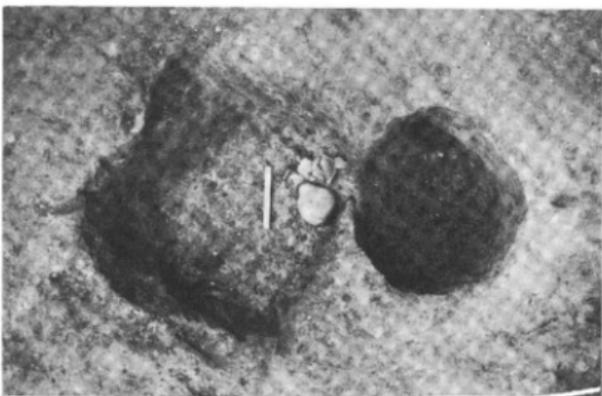
T - 2 瓦溜平瓦出土状况

B地区西部は地山層が後世において削られることがすくなく、2～3の遺構の検出に成功した。これらの遺構については、平面図第2図を参照されたい。

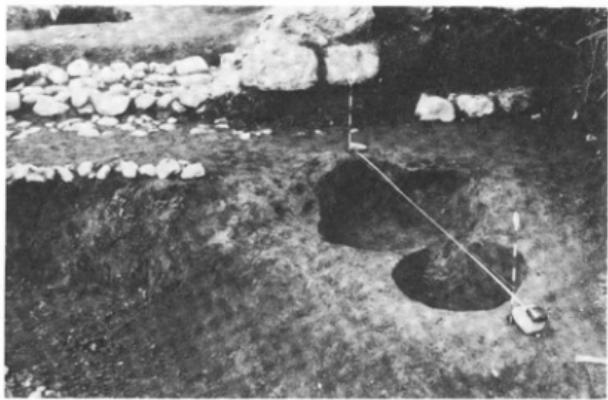
自然の地山層（黄褐色粘土層）に切込んだ弥生後期終末（ヒビノキⅡ式土器）の時期の2つの貯蔵穴が発見されている。P-1・P-2はそれである。P-1は貯蔵穴外に、P-2は貯蔵穴内に柱穴1個ずつが発見されている。貯蔵穴からはそれぞれヒビノキⅡ式土器片が出土している。



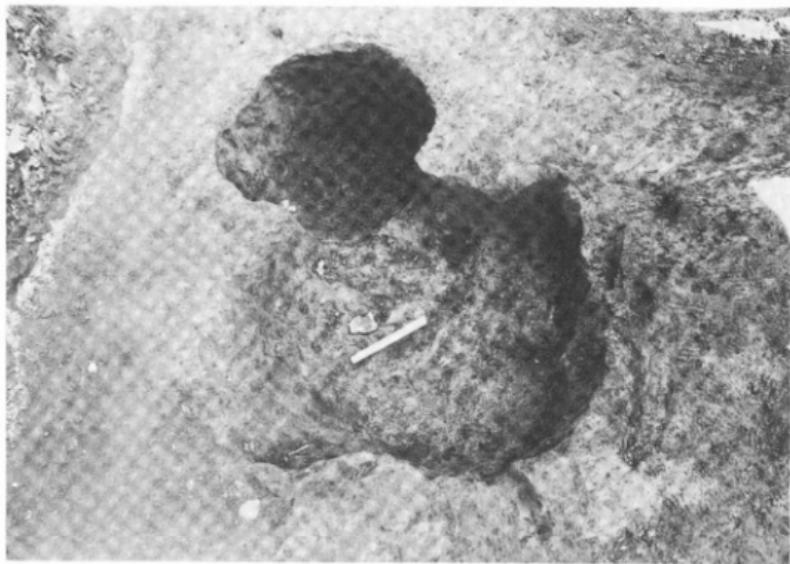
P-1貯蔵穴内古瓦等出土状況



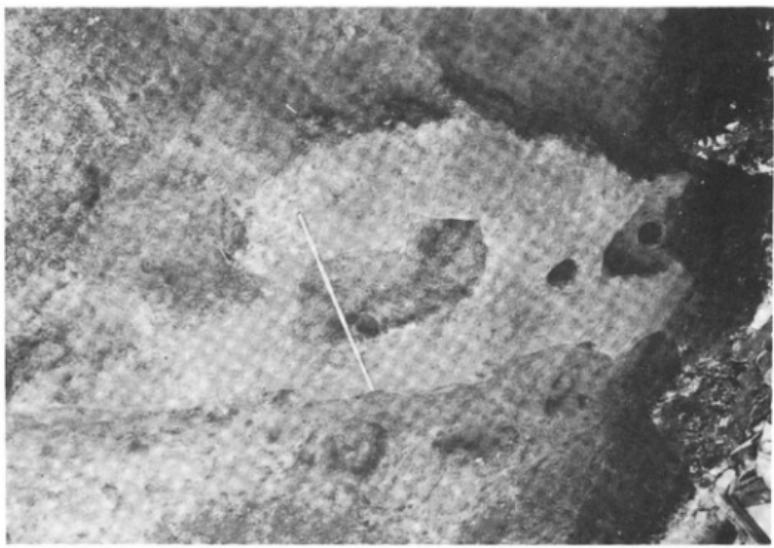
P-1貯蔵穴内ヒビノキⅡ式土器片及び小石出土状況



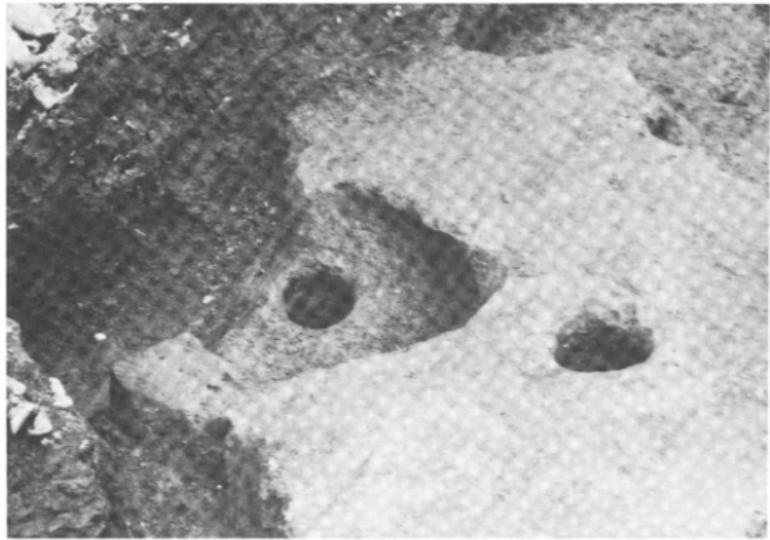
P-1貯蔵穴と川原石群の一部



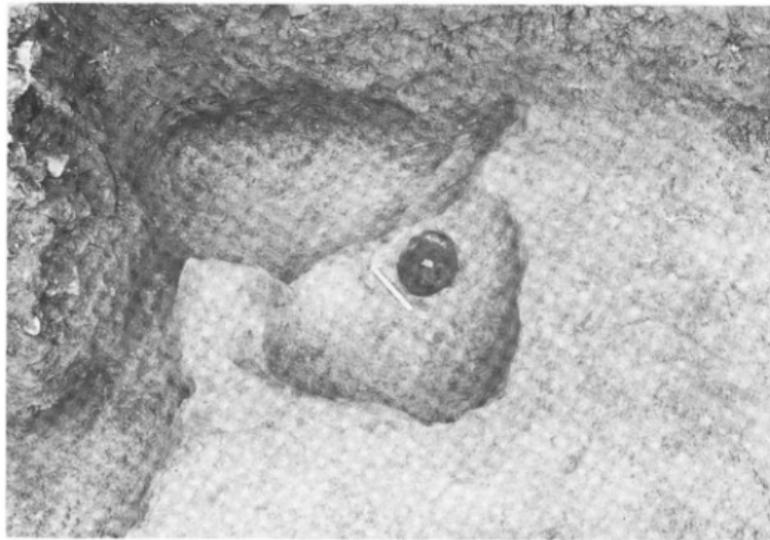
P-1貯蔵穴全景及びヒビノキ II式土器出土状況



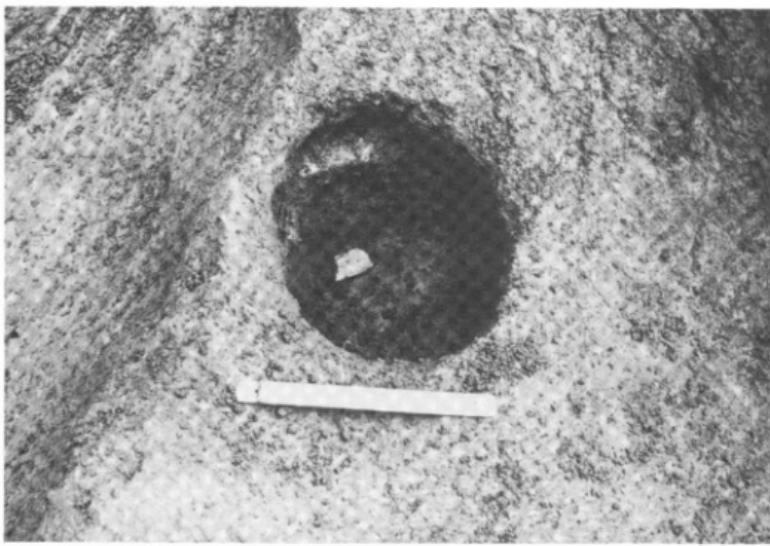
自然の地山層とP-2貯蔵穴



P-2貯蔵穴及び柱穴



P-2全景



P-2貯藏穴内の柱穴とヒビノキⅡ式土器

P-2に接する西側のピット・地山層の残丘中央部のピット・南側の2個のピットは土佐国分寺が平安時代後期になって火災を起こし、全焼したと思われる後に作られた瓦溜用の穴とみられる。これらの瓦溜からは焼けた平瓦が多く出土したが、重弧文字瓦2個・蓮



地山層残丘部全景



花文鎧瓦1個も発見されている。ただこれらの瓦溜は後世の攪乱がみられ、近世の巴文瓦片やそれに伴なう瓦片がわずかであるが混入し、また瓦溜の上部には近世末～近代初頭の陶磁器・土製羽釜・瓦片・寛永通宝などがみられた。

A-6-23グリッドに斜行する落ち込み（掘り込みと言ったが正しいが）は、明治末年の庫裡再建に際して作られた礎石を置くための落ち込みであることは、平面図1と平面図2をかさねてみると明白である。ただこの落ち込みからは、不思議と中世遺物が出土している。その主なものは、南宋の青磁碗破片・常滑大甕口縁部・古備前播鉢・元祐通宝であって、すべてが室町時代のものといえよう。

結局切込まれた地山は、国分寺創建当初の伽藍の土壇などではなく、古くは弥生時代終末から、そして平安時代末以降今日まで数次にわたって瓦溜・建築の基礎等に利用された痕跡をとどめたものと言ってよかろう。

(岡本)



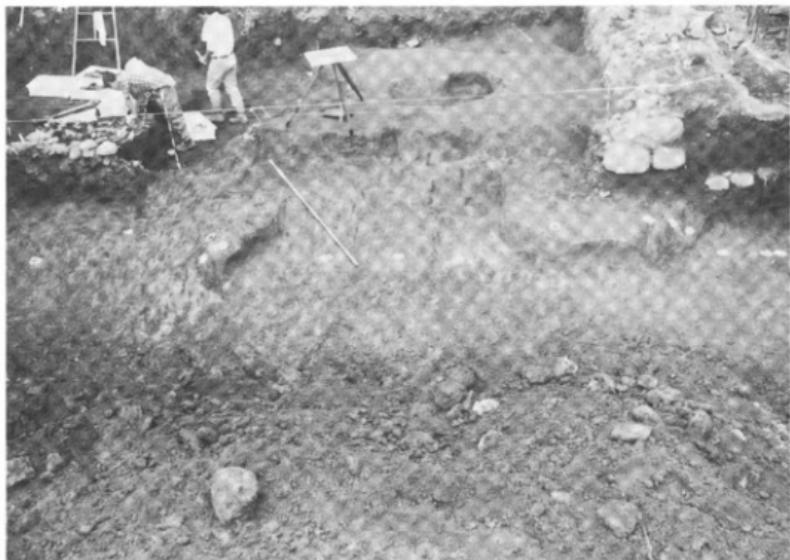
古瓦、近世～近代初頭遺物出土状況

III. B地区西部

B地区西部を地山層まで掘り下げて判明したことであるが、平面図第2図にみる如き丸杭の痕跡を14個所にわたって発見した。発見された14個所の杭列の東部にも、これにつづく杭列があったとも考えられるが、B地区東部の地山層およびその上層は、すくなくとも近代初頭に掘りさげられ搅乱されているので、この杭列の検出はできなかった。

この杭列について、土佐国分寺所蔵の古配置図をみると、付近に池（用水池—近世になって国分寺内にできた水田に水を給するためのもの）があったことが判っているが、この杭列は池の一方の岸辺に護岸のために打たれたものとみられる。なおこの杭列は木杭として発見されず、杭の柱穴として発見されている。

この用水池は藩政期に掘られたことはわかるが、すくなくとも今回の発掘によって出現した庫裡の礎石が造られる以前に埋められている可能性があり、その時期は明治初年と推定される。その時代推定の根拠は池を埋めた時に作られたと思われる瓦溜（平面図第1図のT-2）のなかから出土する最も新しい瓦片による。なおこの瓦溜の末端は最も東端の

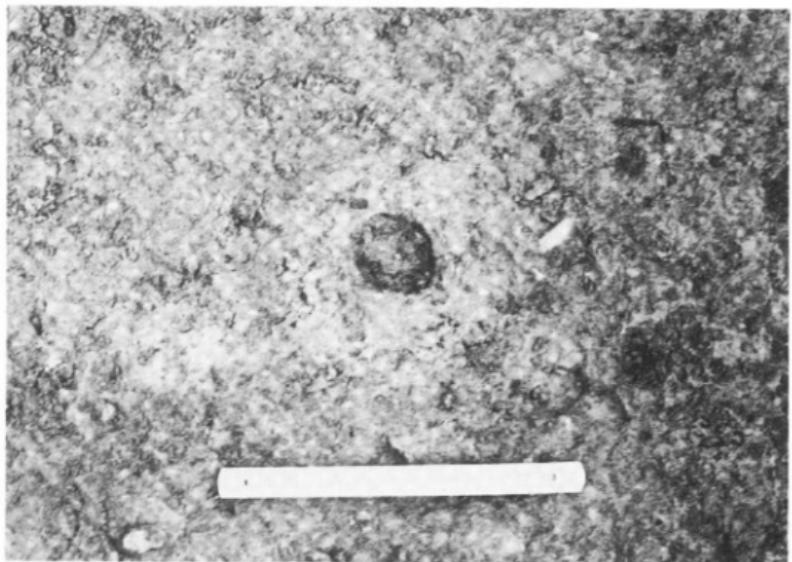


丸杭の痕跡出土状況

杭の付近まであったのであるが、この部分の瓦は明治末年の庫裡再建（従来の庫裡よりも大きくなれたと思われる）によって、庫裡建築に邪魔になる部分だけ除去し、これをT-1の部分に移し、うず高く盛ってT-1の瓦溜が生じたのである。

発掘によって判明した用水池の北岸は、地山の自然の傾斜を利用したと思われる。それがゆえに池を埋めた時に作られた瓦溜（T-2）は北が高く南に傾斜していたのである。なおB地点の北部は戦時中に防空壕が掘られたこともあって、その擾乱ははげしい。

（岡本）

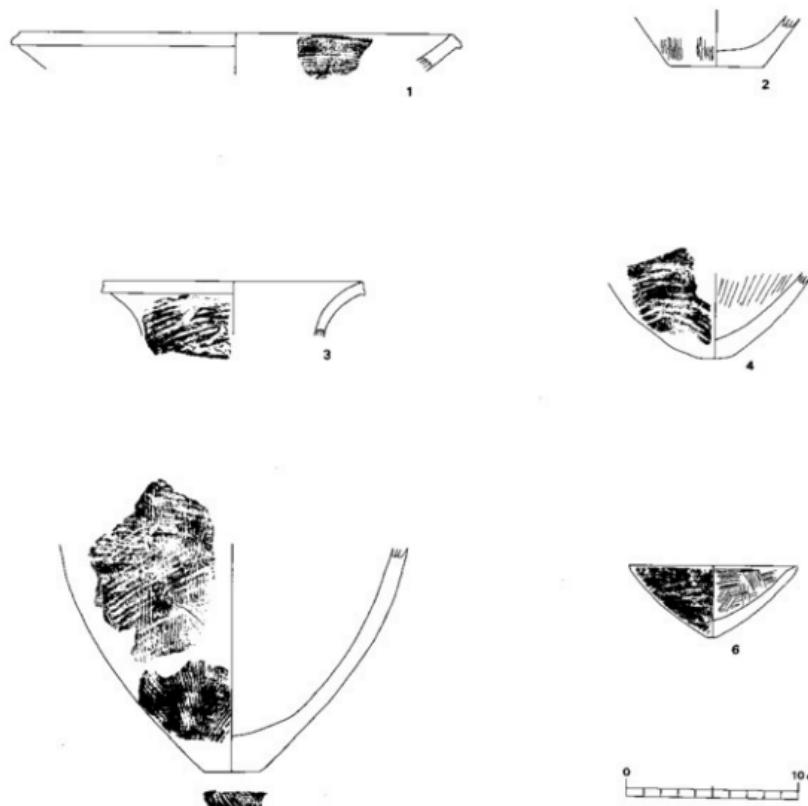


丸杭跡近景

3. 出土遺物

I. 後期弥生土器

南四国弥生後期後半のヒビノキⅡ式土器である。1～2はピット2より出土したもので、1はピット内柱穴より発見されている。口縁がやや上下に張り、内面に3本の横目が横走

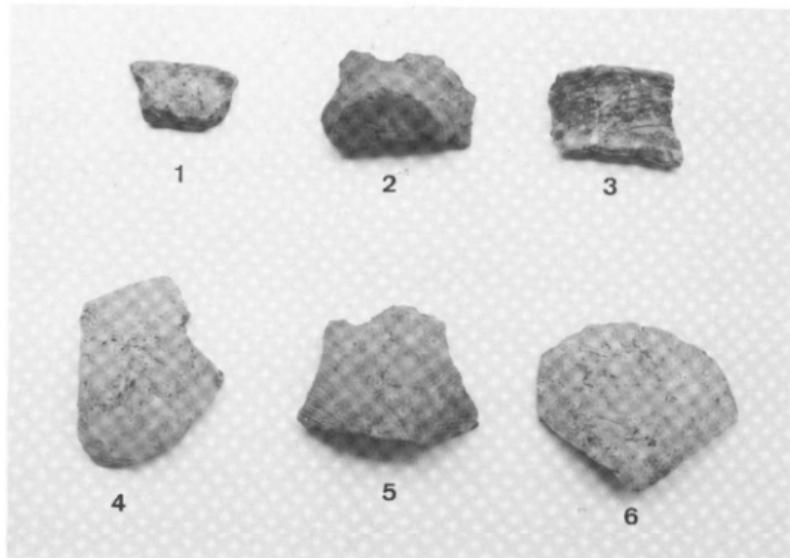


第3図ヒビノキⅡ式土器群実測図

する。赤褐色である。2は壺形底部で刷毛目が残っている。外面赤褐色、内面黒色、外面上に指頭圧痕が残っている。

3～6はピット1より出土したヒビノキⅡ式土器群である。3～5は變形で、3は口縁部、赤褐色で胎土に砂粒を多く含む。口縁端わずかに拡大す。外面叩目横走する。4は丸底に近い平底の底部である。黄褐色で外面に叩目を持つ。内面には荒い刷毛目がある。5は小さな平底を持つもので底部近くは刷毛目を持つ。下胴部までは叩目が横走する。胎土に砂粒を多く持ち黄褐色であり、内面は黒く煤けている。内面の底部近くは指頭圧痕がある。外面の胴部以上にも煤が付着している。底面にも刷毛目がある。6は尖底風の碗形で黄褐色で、外面に叩目、内面に刷毛目がある。

(岡本)



ヒビノキⅡ式土器群

II. 須恵器

古墳時代と奈良時代中期から平安時代後期までの、各種の須恵器が出土している。

杯（第4図2）

蓋受けの立ち上りは直立するが、あまり高くはない。灰黒色硬質な焼きである。土佐の須恵器Ⅲ式に編年されるものである。6世紀中葉に位置づけてよからう。

壺形（第4図1）

直口壺の口頸部である。頸部は斜めに直立するが、口縁部はやや内傾している。器面には3本の沈線があり、その間に上部は5本、下部には8本の輪描波状文が施されている。

器内面には一部自然釉がみられる。土佐の須恵器Ⅲ式に編年される。

蓋（第4図3. 4. 5. 6. 7. 8）

杯の受口の径には大小がみられる。蓋上部のつまみは宝珠形が退化した大形の扁平に近いものである。

杯（第4図13. 15）

高台をもつ杯は焼成もよく硬質で、口縁部を欠ぐが、口唇部でやや外反するとみられる。13の杯は底部が平底に近いものとみられる。

高杯（第4図11. 12）

脚部11は中央部に1本の沈線がみられ透穴はない。裾が大きく広がるもので、12の杯部が伴なうとみられる。杯の底部に近く1段の棱が施され、口縁部はやや外反している。ともに灰黒色で焼成よく硬質なものである。

壺（第4図9）

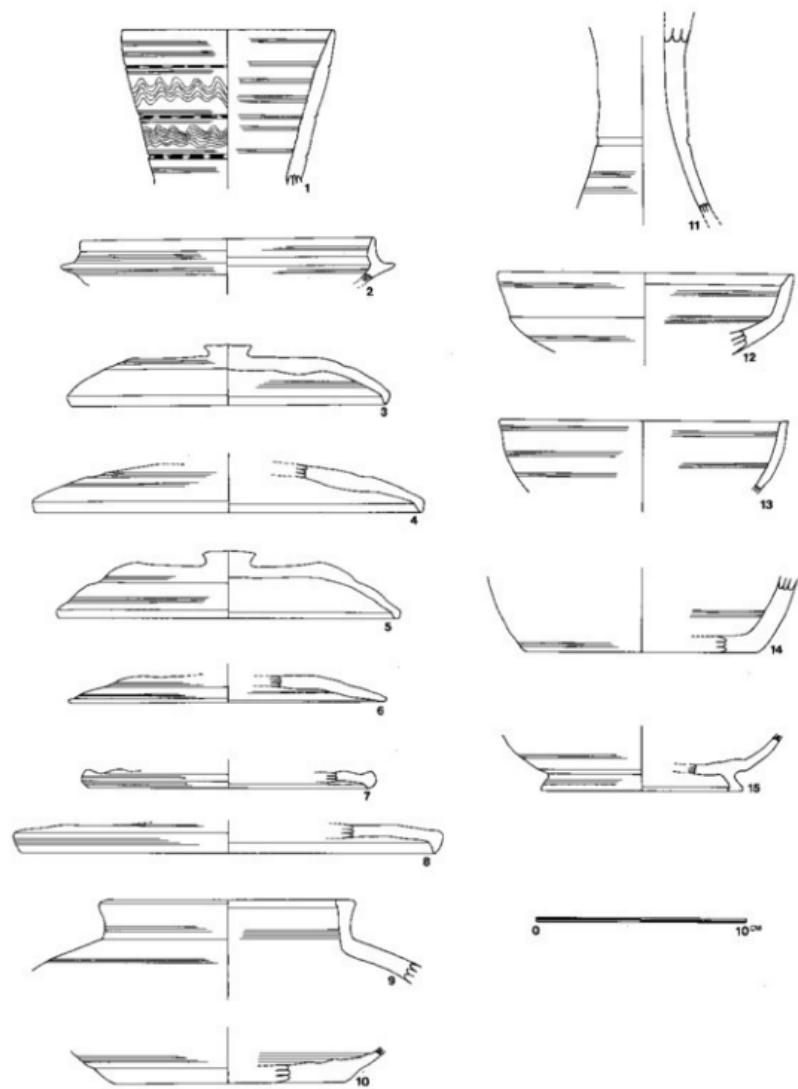
口頸が短かく直立する。肩部はやや丸味がみられる。胴より下部は欠損している。胴部最大径は胴上部にあるとみられる。

瓶（第4図14）

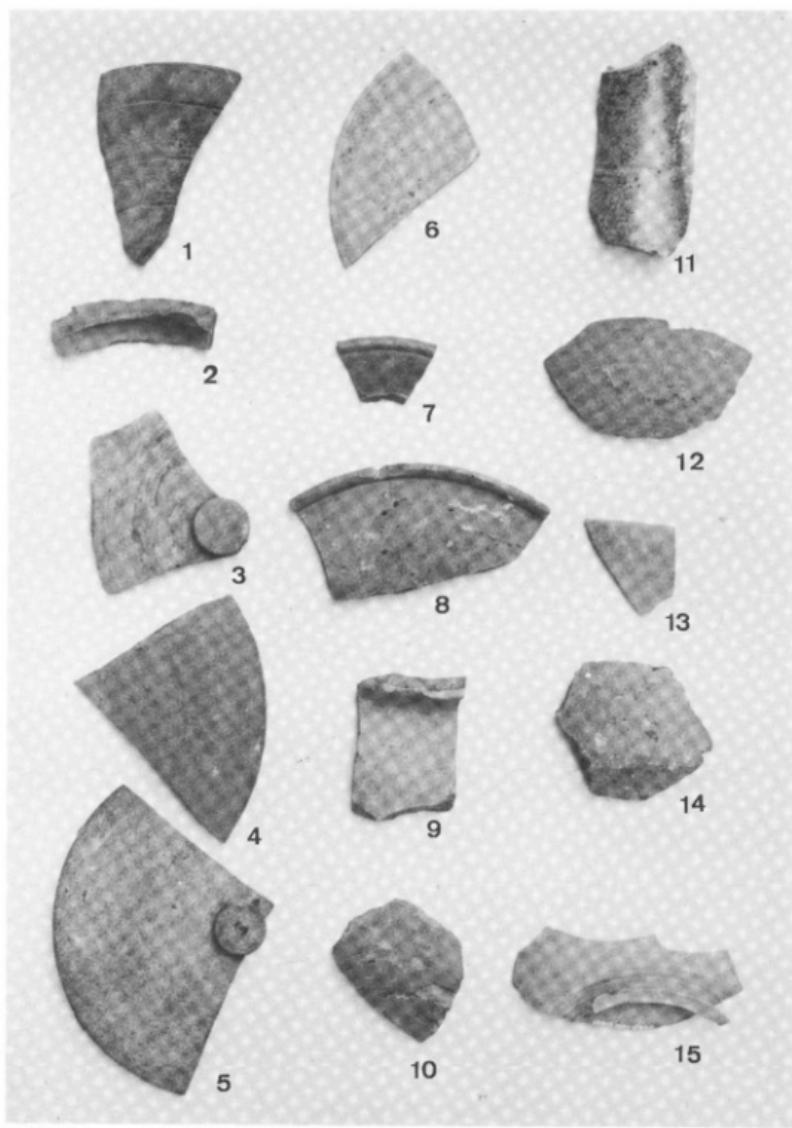
平底で胴中央部は丸味をもっている。

以上述べてきた3～15までの蓋と杯・高杯・壺・瓶は奈良中期から平安時代初期に位置づけられるもので、土佐国分寺の創建当時のものである。そしてこれらの須恵器には2次的に火を受け煤けているものがある。なお出土須恵器は小破片になっているものが多い。

（廣田）



第4図 須恵器実測図

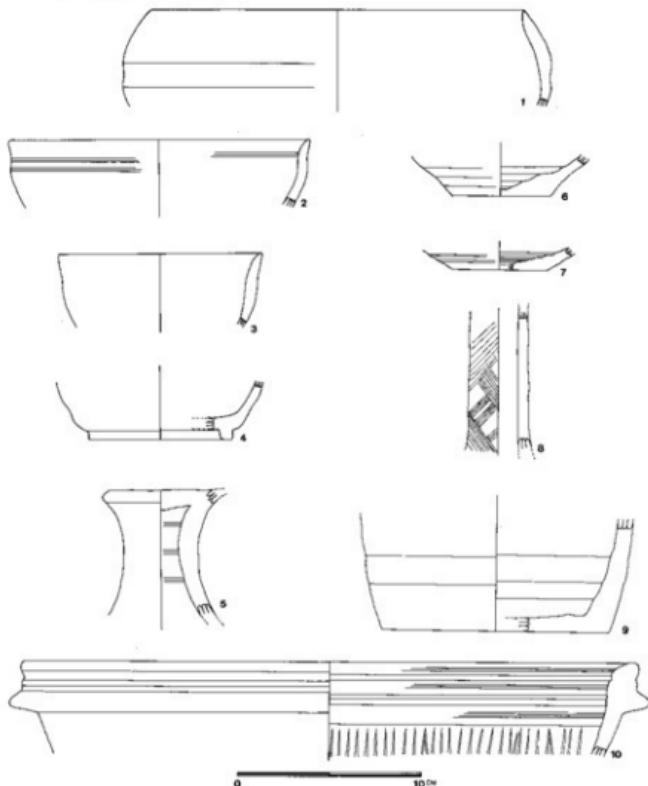


須惠器片

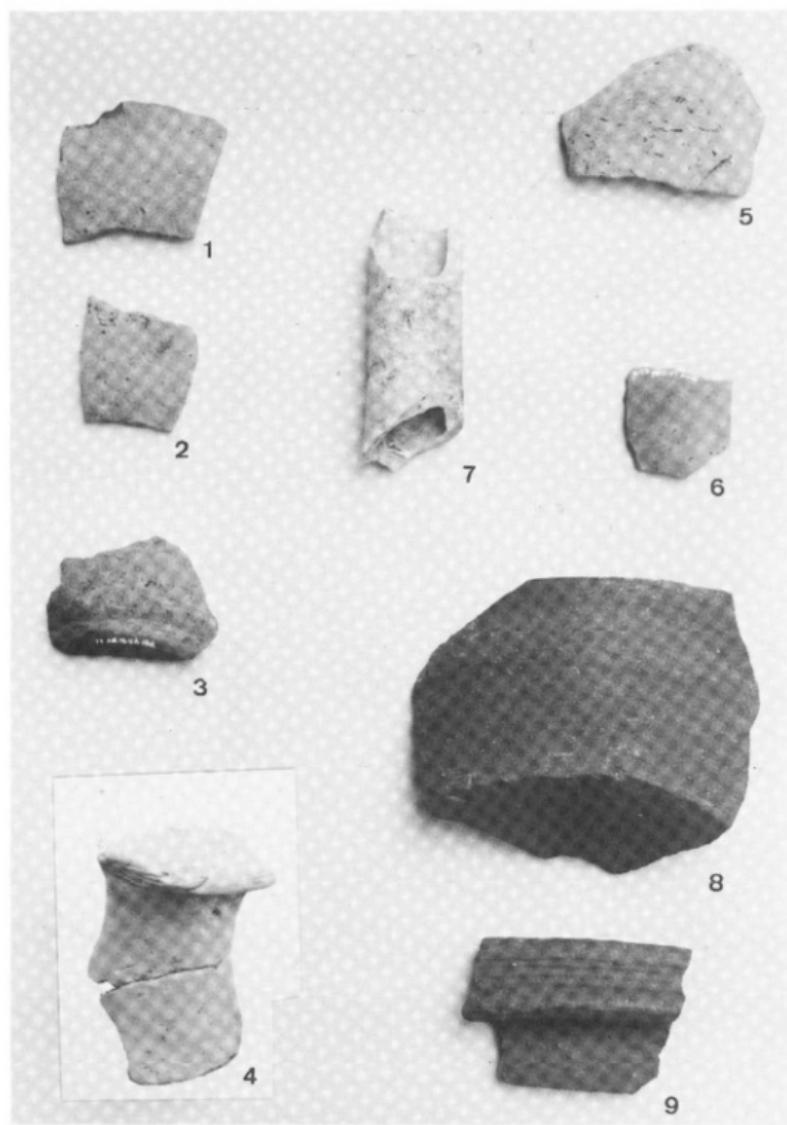
III. 歴史時代土師器（第5図1～5. 8）

土師器類の出土量は多いが、大部分が小破片である。器形のわかるものは鉢形・椀・杯・高杯などである。4の杯は貼り付高台で、高台は低く直立する。5の高杯脚部は短かく裾は大きく広がるものである。8の高杯脚部は5の脚部より、やや後出のものであろう。これらの土師器類はともに赤褐色を呈し、焼成もよく胎土には多量の小砂粒を含んでいる。そして時期的には奈良時代中期から平安時代前期のものとみることができる。これらの土師器と異ってロクロ痕の明瞭な、そして底部に糸切のある6・7は、本地方では室町時代に使用された、土師質土器である。

(廣田)



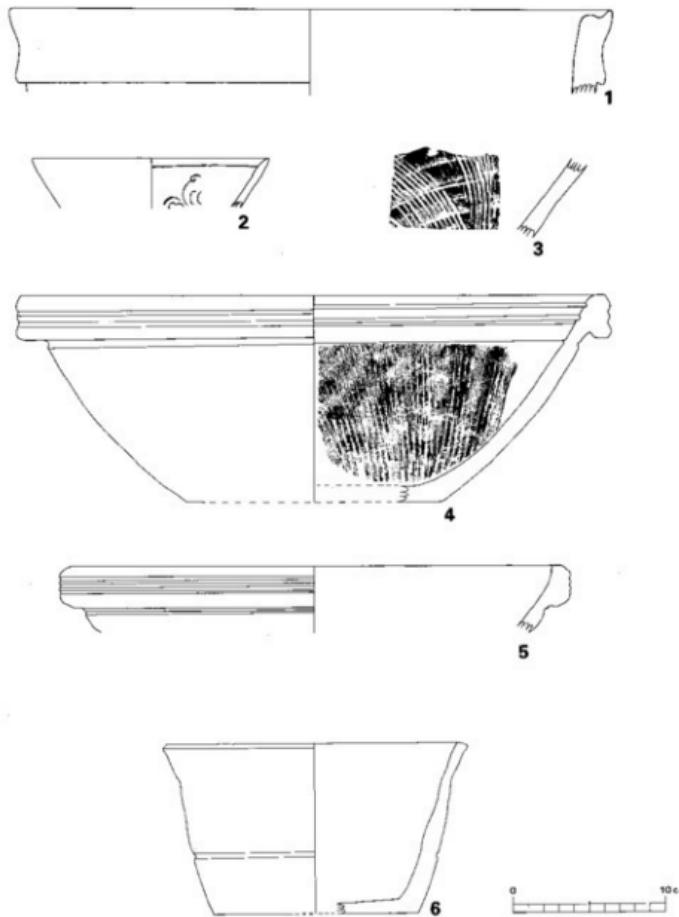
第5図 土師器及び古備前実測図



土師器（1—7）及び古備前（8・9）

IV. 中・近世遺物

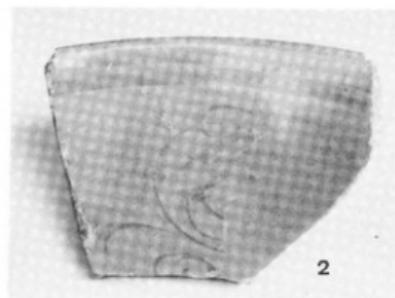
A-6-23グリッドに斜行する落ち込み出土の中世・近世初頭遺物である。以下紹介するものは落ち込みのなかから一括して出土している。1は常滑大甕の口縁部である。常滑の第Ⅲ型式の前半（杉原章「常滑窯業の歴史」常滑窯業史）のN字状の折り返し口縁である。



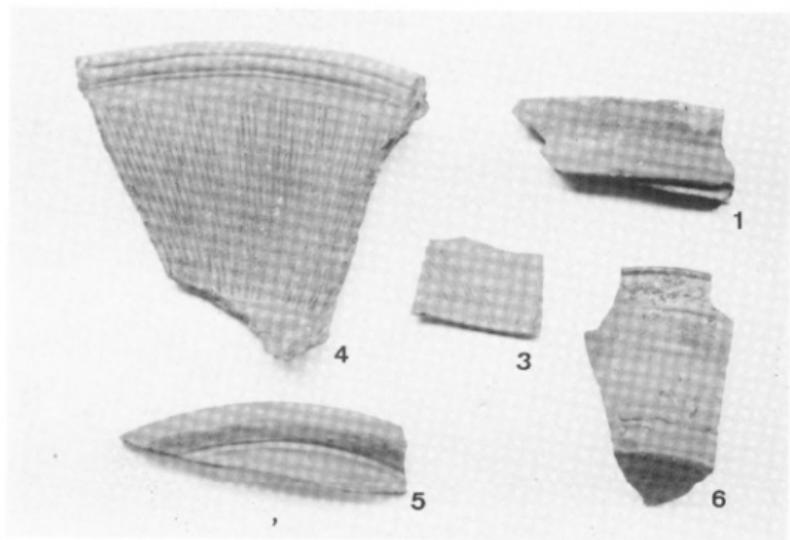
第6図 常滑青磁古備前実測図

る。美しい褐色で口径39.1cm、鎌倉時代後葉～室町時代前半。2は青磁碗、胎土は白色で透明度の高い朽葉色の釉薬のかかった中国南方諸窯のものである。つる草状の文様が陰刻されている。3～6は古備前、3～5は擂鉢の破片、3は第Ⅳ期の備前一室町時代（間壁忠彦「中世の備前焼」中国地方の古陶）4は口縁部が外側に広り張り出して、幅広い帯状の口辺をめぐらす。その上に2条の条線をめぐらす。内部の樅目は一面に細線がほどこされる。江戸前期、口径38.2、高13.4、底径16.7cm。5も江戸前期、口縁が外側に張り出しているが、その部分に3条の条線がみられ、頸部にも1条の条線がみられる。口径32.2cm。6は備前の鉢。やや外反した口縁の鉢で、下胴部に沈線が1条ある。桃山時代。高11cm、口径19.5cm、底径13.3cm。

(岡本)



2



4

3

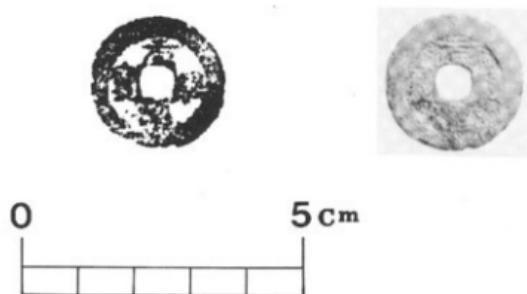
5

1

6

A-6-23グリッドに斜行する落ち込みから発見された遺物は中世と近世前半のものに限定されるが、それらの遺物と伴出したものに中國錢1枚がある。元祐通宝篆書錢（北宋元祐8年—西暦1093—鋳造）であり、わが国中世流通錢の1つである。

(岡本)



第7図 元祐通宝

B地区西部の瓦溜上部出土の近世末～近代初頭の陶磁器類。磁器として鉢・飯茶碗があり、陶器として尾戸焼の灯明皿・抹茶茶碗、それに通称五郎八茶碗と呼ばれる雑器の茶碗である。さらに土器として土製羽釜がある。土製羽釜は径9.8cm、高さ6.6cmの小形である。供物用のものを煮たものであろうか。

(岡本)



B地区西部瓦溜上の出土物

B地区西南端の落ち込みより一括出土した磁器類。飯茶碗・小皿・湯呑茶碗・鉢・灯明皿・油壺であるが、灯明皿・油壺は能茶山製の磁器である。

(岡本)



B地区西南端落ちこみ出土物

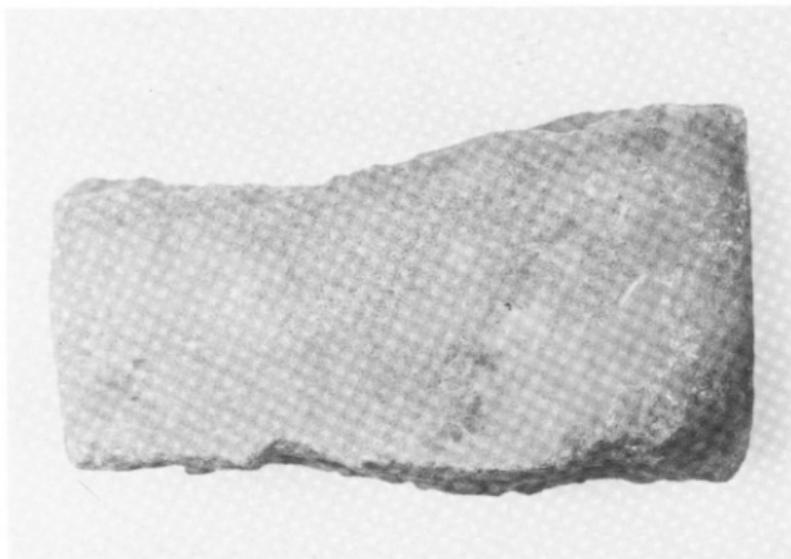
古備前（第5図9、10）

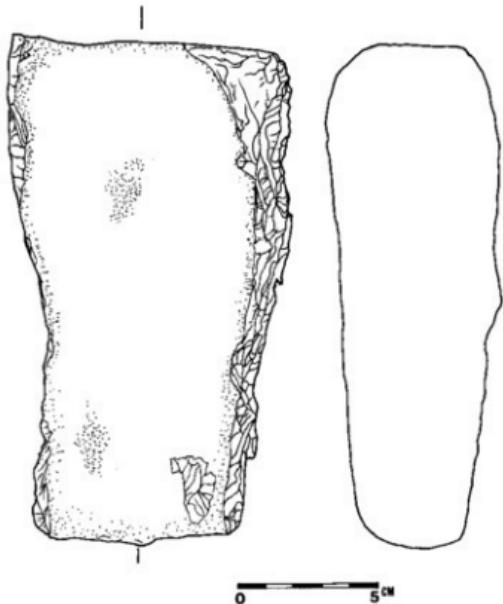
古備前焼の甕で、底部近くの小破片である。赤褐色を呈する。10は備前擂鉢で、擂鉢の内部の櫛目は密である。甕・擂鉢とも江戸時代のものとみられる。

砥石（第8図）

砂岩の自然石を割って作った大形の砥石である。片面だけを使用したものである。

(廣田)





第8図 砥石実測図

V. 瓦類

鎧瓦

複弁蓮花文鎧瓦（第9図1）

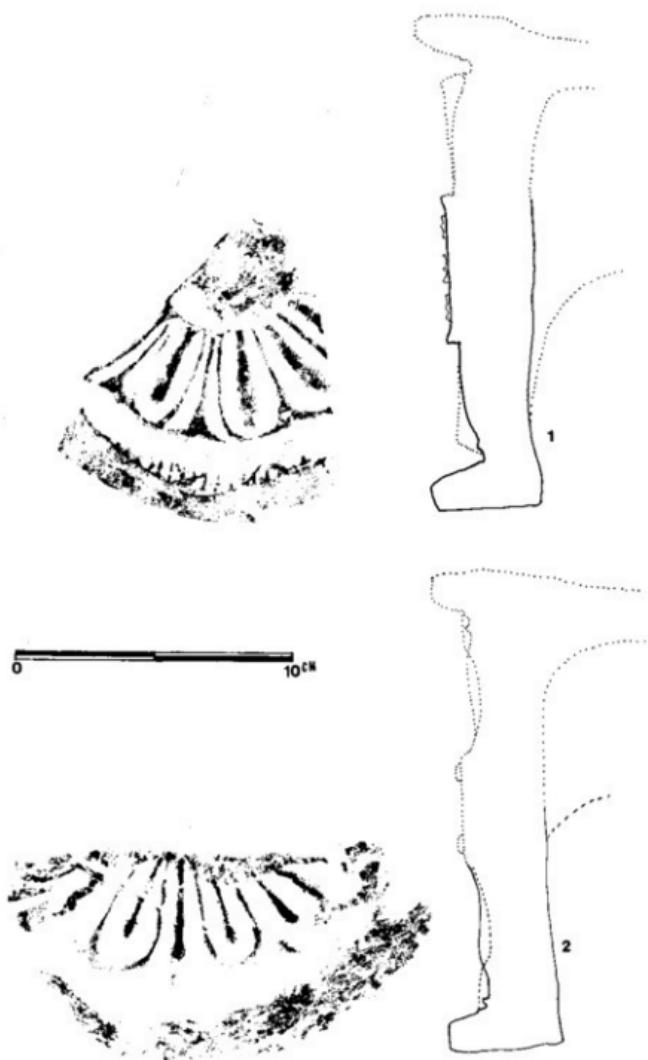
今回の調査では完形のものは出土しなかった。

瓦当の径19.2cm, 中房の径5.5cm, 厚さ3.7cm～4.5cmである。周縁の幅1.5cmの内傾縁で鋸歯文がつけられる。

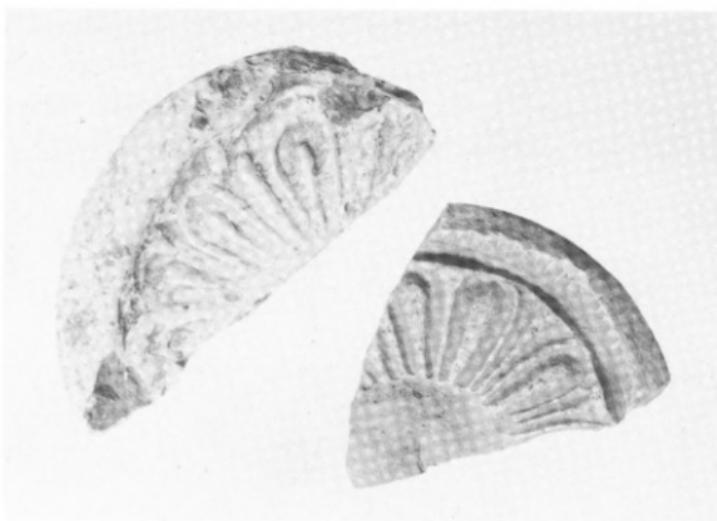
内区は複弁6葉で蕊の数は13ある。弁の中の蕊は同数でなく1葉1蕊, 1葉2蕊がそれぞれ3, 1葉に3蕊が2の割合でおさまっている。中房内の蓮子は10個であり、蓮子は2重円になっている。

単弁蓮花文鎧瓦（第9図2）

2次的に水を受けて軟質になっている。瓦当の径16.5cm, 中房の径4cm, 厚さは4cmである。周縁の幅2cm, 直立縁で素文である。内区の単弁は8葉で蕊は細く表現している。素弁8葉の間弁がそれぞれの蓮弁間に配されている。中房は欠損している。



第9図 蓮花文鎧瓦実測図



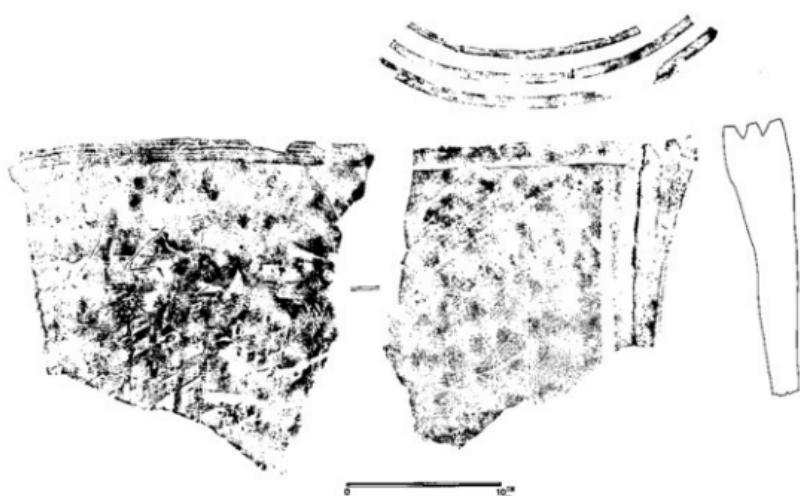
巴瓦

三巴文軒丸瓦で瓦当の径は12cm、内区の珠文は12個、室町時代の鎧瓦とみられる。

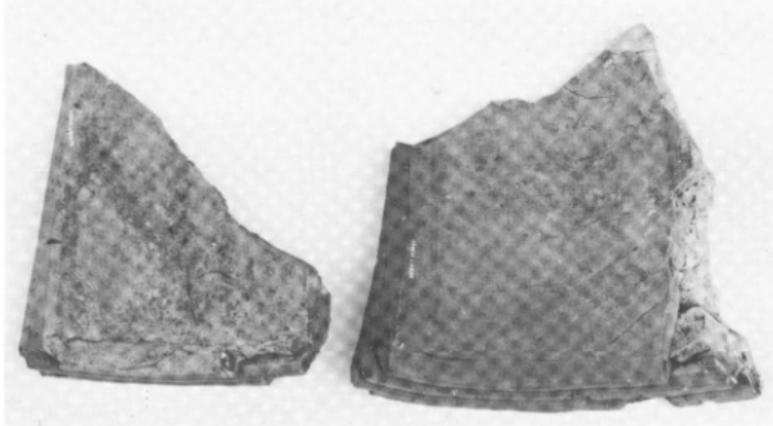
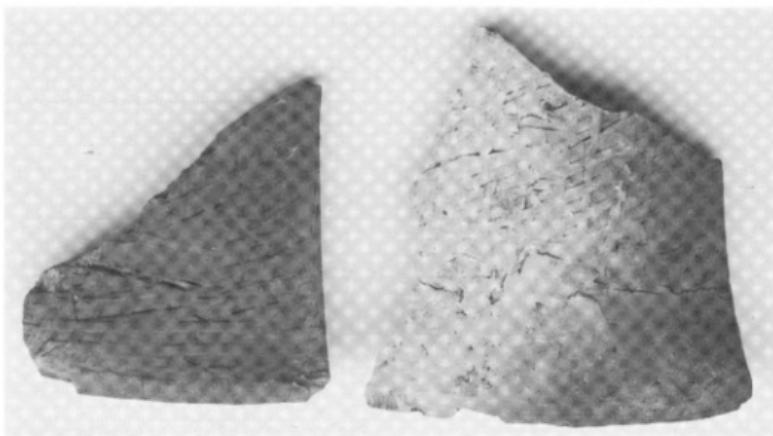
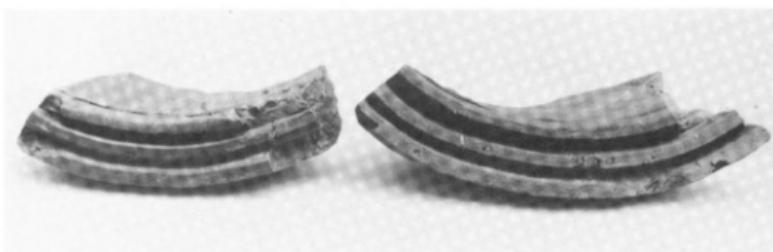


字瓦（第10図）

字瓦として完全なものは出土していない。厚さ4cmで頸がある。整美な三重弧文で断面は台形である。上面全面に布目が施こされており、1部に刷毛目もみられる。裏目には斜格子の叩目がみられ、その上に薄く刷毛目もみられる。



第10図 宇瓦実測図

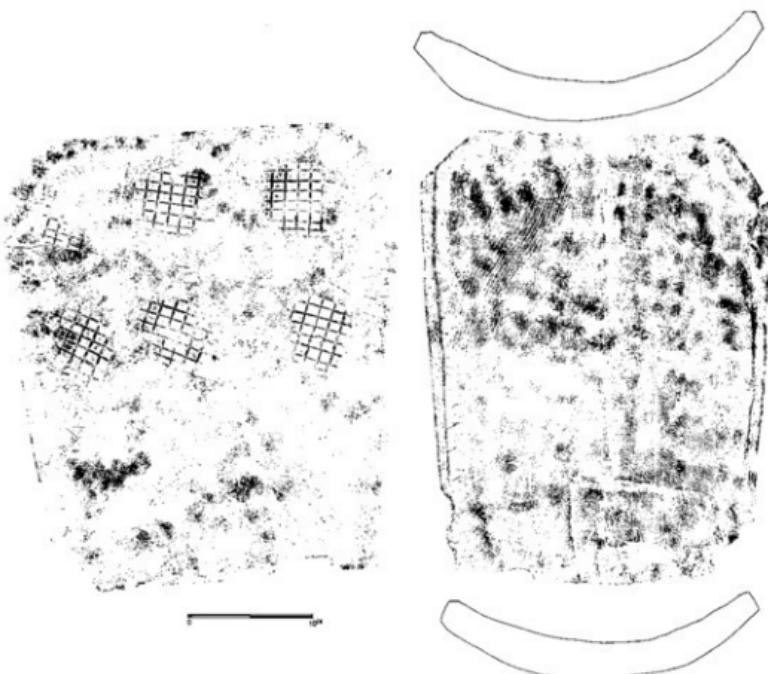


平瓦（第11図）

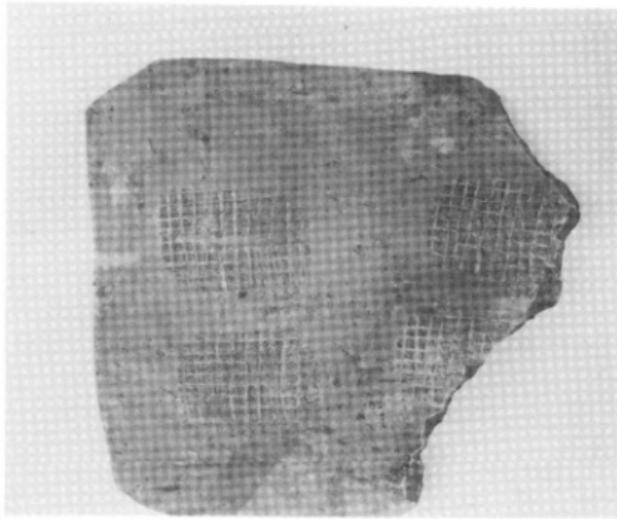
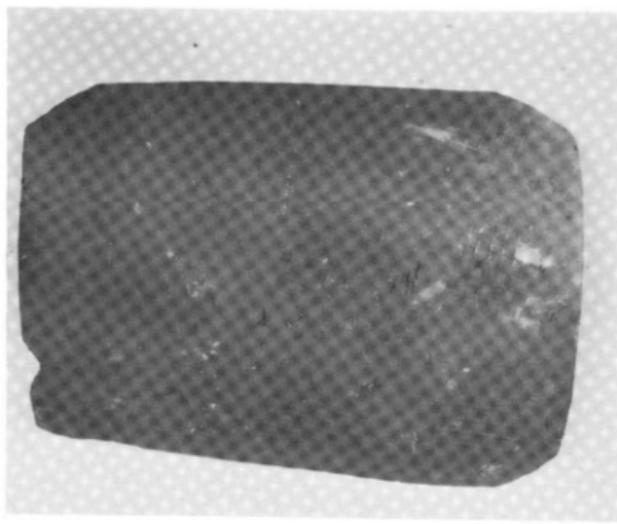
平瓦は出土数が多いが、完全なものは少ない。大きさは長さ36cm、幅28cm、厚さ3cmが普通である。上面の布目は細目のものが多い。

裏面の叩目は次のようなものがある。

1. 繩を廻転プレスした繩目のみられるもの。
2. 全面に小形の格子目のみられるもの。
3. ごく1部に小形の格子目を施したもの。
4. 大形の格子目が1部に施したもの。
5. 小形平瓦の中に叩目のみられるもの。



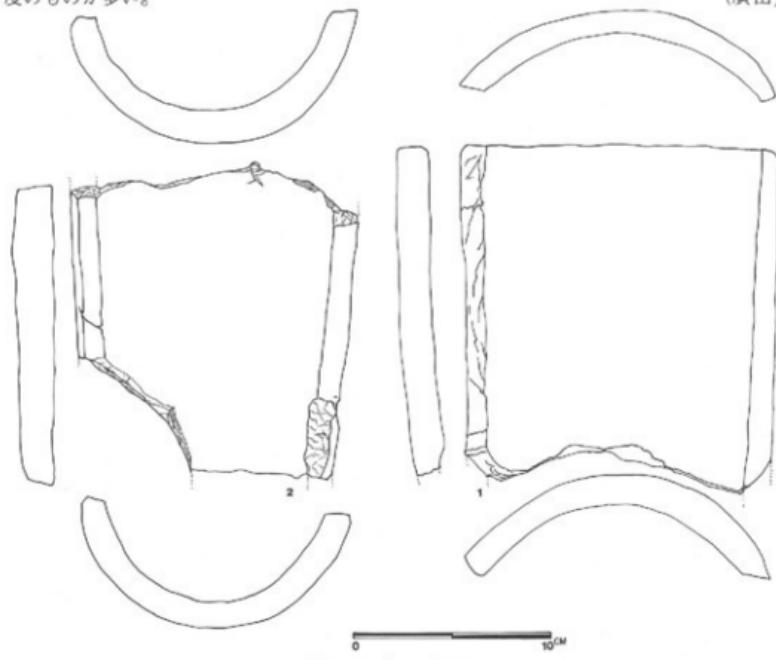
第11図 平瓦実測図



丸瓦（第12図1、2）

丸瓦の出土数も多いが完形品はない。行基葺瓦と玉縁瓦に大別できる。出土量は行基葺瓦が多く、器面は無文のものが多い。内面の布目は平瓦の布目とほぼ同じである。なおこの布目の上を刷毛で斜めにかいたものがある。行基葺瓦は長さ38cm、幅21cm、厚さ2cm程度のものが多い。

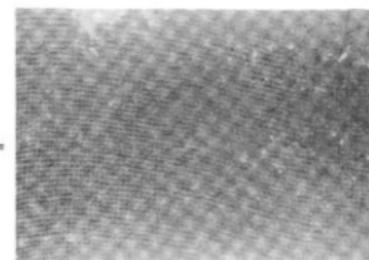
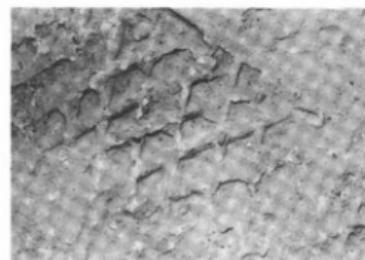
(廣田)



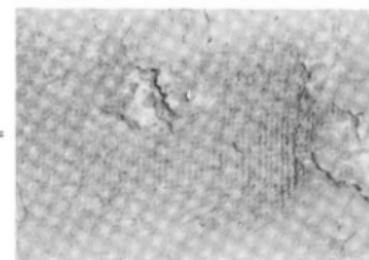
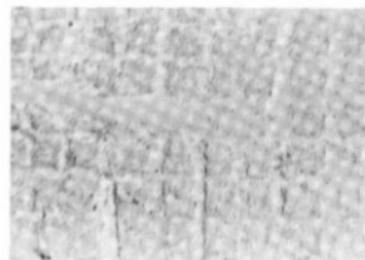
第12図 丸瓦実測図



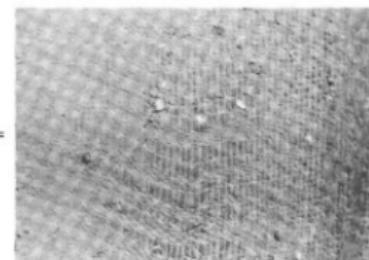
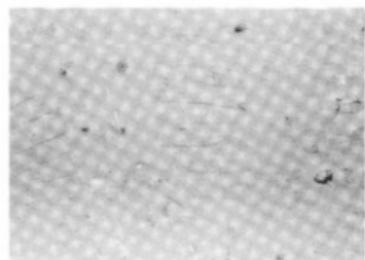
出土瓦の叩目及び布目



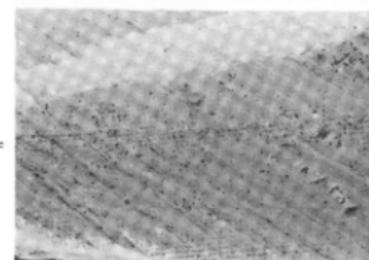
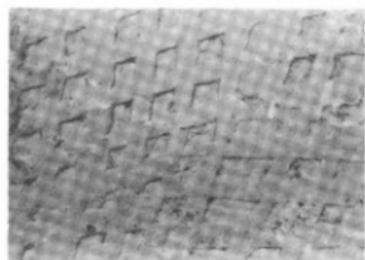
1



2



3



4